

英語読解における予測と文化的親密度¹⁾

西 田 正

序 論

本来、教育は教授者、教材、学習者が三位一体となって成立する活動であり、その主体は学習者である、とすれば、英語教授・学習の研究には、学習者の視点が不可欠である。従来、教授法や教材の開発に際しては、多少なりとも、学習者に関心が払われていたが、最近では、学習の動機づけ、学習意欲、学習環境、などの学習者要因から、英語教育全体を見直す傾向にある²⁾。教授・学習の中心は教授者や教材ではなく、学習者であることを再認識し、学習者を単なる知識や文化遺産などの受容者と見ず、その内容を自ら内在化していく存在であると規定する所に、いわゆる「学習者中心の英語教育」の出発点がある。教授者の役割は、学習者の主体性を保証し、学習の内在化の過程が円滑に進むよう働きかけることである。

Corder³⁾を始め、Error Analysis に関する多くの研究は、英語教授・学習過程に学習者の視点を確立する上で、重要な役割を果たしたと言えよう。それ以前では、学習者の誤りは、教授者により直ちに訂正され、正しい反応を強化するために、消去されるべきものと考えられていた。しかし、誤りの中に言語体系を発見する Error Analysis の研究は、誤りを、教授者の視点からだけでなく、学習者の観点からも捉え直す姿勢を明確に示している。また、Selinker⁴⁾の中間言語 (interlanguage) 研究、Krashen⁵⁾の Monitor Model 研究などは、言語習得過程における学習者の諸特徴を記述し、学習者の視点を一層明瞭に打ち出している。

「学習者中心の英語教育」が有効に実践されるには、学習者が能動的に知識を内在化していく過程を記述し、分析する研究に負う所が大であろう。筆者は、⁶⁾この立場から、大学生の英語読解過程における特性をCloze Procedureの手法で分析し考察を加え、昨年、その結果を報告した。

本論では、まず第一に、心理言語学の研究成果に基づき、読みを読み手の主体的受容過程と規定し、この過程で働く予測の活動を構造的に把握する。そして、大学生を被験者として実施したクローズテストの結果から、予測、文化的距離、英語学力の三者の関係を考察する。

I 読みにおける予測

読みがいかなる活動であり、どのようなモデルによって提示できるかに関する諸説の中で、Goodman⁷⁾は、読みの本質は予測にあるとする。読みの行為は、予測という心理言語的活動を基盤として、開始され、展開される。読みは、文字を入力とし意味を出力とする情報受容過程である。彼のモデルによれば、この過程において、読み手は、言語の冗長性(redundancy)や言語構造の知識を頼りに、情報を収集し、予測し、さらに、場面や文脈に照らし合わせて、予測した内容を検証し、確認していく。彼は、次のように述べている。⁸⁾

... Reading is a selective process. It involves partial use of available minimal language cues selected from perceptual input on the basis of the reader's expectations. As this partial information is processed, tentative decisions are made to be confirmed, rejected, or refined as reading progresses.

More simply stated, reading is a psycholinguistic guessing game. It involves an interaction between thought and language. Efficient reading does not result from precise perception and identification of all elements, but from skill in selecting the fewest, most productive cues necessary to produce guesses which are right the first time.

このモデルは、読みにおける読み手の能動的、かつ、主体的な選択行為を正面に押し出し、受動的活動と見なしていた従来の読みについての考え方を批判しており、この意味においても、重視すべき示唆に富んでいる。しかも、このモデルが読みの本質を捉えているとするならば、我々は、この立場に脚って、外国語としての英語の読みの行為における学習者の主体的活動の内実へ接近でき、その過程を解明することができるであろう。

一方、Goodman 同様、読み手の主体的選択行為を重視する Smith⁹⁾ は、非視覚的情報 (non-visual information) の重要性を主張している。彼によれば、読みは第一義的に眼球運動に依存しているが、視覚だけによる情報収集には限界があり、その限界は知識などの非視覚的情報で補強される。読み手がこの種の情報を多く所有する場合は、視覚による情報は少なくても、読みの活動が進むのである。逆に、読みの過程で、視覚に情報収集の負担が過度にかかる時は、読みは遅くなる。従って、読みは眼球に依存しながら、眼球の背後にある知識にかなり左右される、という逆説が成立する。この見解では、視覚から得る情報の一部が欠如した際に、それを補う非視覚的情報が作動し、それを復元して、読み行為全般が展開していくわけである。換言すれば、視覚的情報と非視覚的情報とが有機的に結合して、読み活動が継続する。Smith の逆説は、予測が中心的働きをなす読みにおいて、常に読み手の知識が関与しており、視覚での読み活動は、その実、多くは非視覚的情報収集である、と理解できる。

II 予測の手掛 - 読みの Strategy

Goodman と Smith の示唆を一步進めて、読み手の strategy、つまり、文字の知覚から意味の理解に至る過程の中で、読み手がいかなる方策を用いてその活動を満足するものに行っているかを考察してみよう。以下、主要な研究成果を概略的に述べておこう。

Carton¹⁰⁾ は、言語使用と言語学習の過程を推測 (inferencing) 活動 - 既知の属性や文脈から未知の意味を類推すること - と見ている。そして、外

国語学習では、その手掛として、①形態論、統語論、などについての、学習言語に関する知識 (intra-linguistic cues)、②借用語、音韻上の類似点などの、学習言語と母国語間に存在する対照言語学的知識 (inter-linguistic cues)、③メッセージの内容に関する知識 (extra-lingual, contextual cues)を挙げている。

Cziko¹¹⁾ は、読みにおける文脈的情報を重視し、この情報は、統語論、意味論、談話、の各レベルにおける制約 (constraint) から成り、読み手は、予測を立てる上で、このような文脈的制約から得られる情報を統合すると考える。同様に、Wildman & Kling¹²⁾ は、意味論、統語論、空間に見られる予測の方策を設定している。意味論レベルの方策では、了解ずみのテキスト内の意味を使って、視覚的に分析できない意味の要素を予測する。読み手は、話題に関する情報—一般的文脈 (general context) と、語の意味的制約—局部的文脈 (local context) を頼りに、次に続く語や語句などの意味を探る。統語論上の予測は、語の品詞、統語的知識などを基礎に、次の語の文法的範疇を設定する。空間の予測は、眼球の次の停留 (fixation) 位置を予測することである。

Olshavsky¹³⁾ は、読みの主体的活動を問題解決過程 (problem-solving process) と見なし、学習者の読書力、興味、題材の3点から、その方策を発見しようと試みた。特に注目に値する点は、彼が、①語に関する方策 (word-related strategies) ②節に関する方策 (clause-related strategies) ③物語に関する方策 (story-related strategies) を設けて、読み手の認知過程を追跡したことである。例えば、①について、読み手は未知の語を文脈から類推し、あるいは、同義語で置換えたり、理解できないまま先へ進む、などの方策を使う。②に関しては、再読、推量、情報の付加、内容と自己との同一視、仮説の構築などの方策を、③に関しては、主題に関わる情報を、それぞれ、利用する。そして、読みは、問題発見方策 (problem identification strategies) と、問題解決方策 (problem-solving strategies) に大別できるとしている。

Graesser, *et al.*¹⁰ は、読みの構成要素を、語彙、統語論上の複雑さ、命題 (proposition) から成る microstructure component と、New Argument Noun、題材の親密度 (familiarity)、語りの調子 (narrativity) を含む macrostructure components に分け、この要素と読みの所要時間、および、読みの目的とが、いかなる関係にあるかを調べた。その結果、読みの速度は microstructure components の分析に要する時間の差であって、macrostructure components を処理する時間の差ではなく、読みの目的が変わっても、microstructure components の分析は影響を受けない、と論じている。

以上の諸研究から予測が種々の要因と結び付き、重層性を示すことが理解できる。諸要因の中で、題材の文化的内容は、特に、外国語学習の場合、予測の質や量と密接に結び付いていると予想できる。Steffensen, *et al.*¹⁵ は、アメリカ人、インド人双方の大学生に、アメリカ文化とインド文化内の結婚について記述した抜粋文を与え、題材の文化的背景が被験者に及ぼす効果を見た。実験の結果では、学習者にとって身近な文化内容は、読みの所要時間が短く、想起量 (the amount of recall) も多く、理解度も高くなった。

Ⅲ 予測と題材に関する実験

1) 目的

学習者の読みにおける予測活動が、題材の文化的距離と英語学力といかなる関係にあるかを解明することが本実験の目的である。

2) 仮説

仮説 1 題材の文化的距離に関係なく、英語学力の高い集団は低い集団より、予測が高い。

仮説 2 英語学力の高低に関係なく、文化的に近い題材は予測力を高める。

仮説 3 題材の文化的距離に関係なく、英語学力の高い集団は、低い集団より、意味把握に基づく予測を立てる。

仮説 4 英語学力の高低に関係なく、文化的に近い題材は、意味把握に

基づく予測力を高める。

仮説5 題材の文化的距離に関係なく、英語学力の低い集団は、高い集団より、文法的知識に依存する予測を立てる。

仮説6 英語学力の高低に関係なく、文化的に遠い題材は文法的知識に依存する予測を高める。

3) 方法

i) 被験者 広島大学総合科学部で実施する英語 I を履習する 1 年生 60 名。

ii) 材料 英語の学力を測定するために、*CELT*¹⁶ の S-A Form (文法テスト), V-A Form (語彙テスト), L-A Form (聴取テスト) の 3 種の標準テストを用意した。読みの予測を調査する方法として、*Cloze Procedure* を採用した。クローズテストの作成に当り、統語論上の複雑さと話題が、それぞれ、一定で文化的距離だけ異なる素材を選んだ。¹⁷ 言語構造の複雑さの指標は、T-unit, T-unit 内の語数(W/T), T-unit 内の節の数(C/T), 節内の語数(W/C)に求め、¹⁸⁾ 表 I のように、統語論上ほぼ等質の素材を用いた。話題は、結婚を控えた男女とその両親という、各文化に共通でしかも、文化的特性の強い内容とした。素材の文化的距離は表 II の如く、日本人学習者にとっては、日本文化が最も身近で、アラブ文化が最も遠い。学習言語である英語の文化は、両文化の中間に位置する。各クローズテストは、

Table I

Cloze tests	Syntactic complexity			
	T-units (Words)	W/T	C/T	W/C
C-I (Japanese)	23 (316)	13.74	1.44	9.58
C-II (American)	23 (315)	13.70	1.70	8.08
C-III (Arabian)	22 (313)	14.23	1.59	8.94

Table II

Cultural familiarity	high	middle	low
Cloze tests	C-I	C-II	C-III

抜粋部分の最初の文は原典通りとし、第2番目の文の文頭より、6語おきに削除し、49の補充箇所を作った。題目はすべてに添え、学習者が予測を立てやすいよう配慮した。(Appendix 参照)

iii) 採点法 *CELT* は正答に1点を与えた。従ってS-A FormとV-A Formは、それぞれ、75点満点、L-A Formは50点満点である。クローズテストの採点には、正語法(Exact Replacement Scoring), Semantically Acceptable Scoring (SEMACE), Grammatically Acceptable Scoring (GRACE)¹⁹⁾の3方法を用い、各規準に合致した反応に1点を与えた。

4) 手順

まず、英語Iを受講するクラス全員に*CELT*を実施し、受験者の中から無作為に60名を選び、A、B、2グループを構成した。次に、両グループにC-I、C-II、C-IIIのクローズテストを実施した。この実施に際して、被験者に与えるテストの順序が得点に影響すると予想されたので、各グループをさらに6グループに分けて、順序を変えてテストを行った。各クローズテストの所要時間は20分であった。各種テストの実施期間は昭和56年6月末から7月上旬であった。

5) 結果

AとBグループに実施した*CELT*の結果、同テストの信頼性、両グループ間の有意差は表Ⅲに示した。Aグループは、文法テスト(S-A Form)、語彙テスト(V-A Form)、聴取テスト(L-A Form)のすべてについて、Bグループより平均得点が高く、両グループ間の差は、0.1%あるいは1%水準で有意であった。従って、Aグループは、Bグループと比較して、英語学力の高い集団であることがわかる。*CELT*の信頼係数から判断すると、同テストは、標準テストとしては、信頼性が少し低くなった。

A, B各グループのクローズテストの成績は表 IVと Vにまとめた。両グループを比較すると、いずれの採点法を取っても、すべてのクローズテストで、AグループはBグループより平均得点が高い。両グループとも、正語法の得点は、C-I, C-II, C-IIIの順で下降しており、この傾向は意味を基準にした採点法 (SEMAC) の得点にも見られる。しかし、文法を基準とし

Table III Mean scores and standard deviations of CELT

	CELT		
	S-A	V-A	L-A
A (N=30)	$\Sigma X=1811$	$\Sigma X=1338$	$\Sigma X=818$
	$X=60.37$	$X=44.60$	$X=27.27$
	$SD=5.06$	$SD=8.95$	$SD=4.43$
	$KR-20=0.43$	$KR-20=0.82$	$KR-20=0.50$
B (N=30)	$\Sigma X=1576$	$\Sigma X=987$	$\Sigma X=690$
	$X=52.53$	$X=32.90$	$X=23.00$
	$SD=4.67$	$SD=6.74$	$SD=5.15$
	$KR-20=0.52$	$KR-20=0.66$	$KR-20=0.65$
	$t_0=6.23***$	$t_0=5.72***$	$t_0=3.44**$

***P < .001 **P < .01

た採点法 (GRCO) に関しては、Aグループでは、C-I が最も得点が高く、C-III, C-II の順で低くなった。一方、Bグループでは、C-III, C-I, C-II の順序になった。正語法に対する SEMAC 得点の増加率を算出すると、Aグループでは、C-III が最高で C-I, C-II の順序で低くなり、Bグループでは、C-II が最高で C-III, C-I の順序で低くなった。一方、正語法に対する GRCO の増加率は両グループに共通して、C-III が最高で C-I が最低である。SEMAC に対する GRCO の増加率にも同様な傾向が見られた。

Table IV

**Mean scores of cloze tests
and
Increase in scores, Group A**

	C-I	C-II	C-III
Exact	25.17	22.67	20.50
SEMAC	31.47	28.10	27.80
GRCO	38.03	36.10	37.50
SEMAC Increase Over Exact	25.03%	23.95%	35.61%
GRCO Increase Over Exact	51.09%	59.24%	82.93%
GRCO Increase Over SEMAC	20.85%	28.47%	34.89%

クローズテストの得点で示された予測力と、英語学力と題材の文化的距離の関係をさらに検討するために試みた2元配置分散分析の結果は、表VI, VII VIIIに掲げた。表VIの如く、正語法での平均得点を学力差と文化的距離の条件差から分析すると、学力差 ($F(1, 2) = 44.9358, p < .05$) と条件差 ($F(2, 2) = 22.6230, p < .05$) の双方において有意差が検出された。クローズテスト間の有意差を5%水準でみたところ、C-I > C-II, C-I > C-IIIの関係が判明したが、C-IIとC-IIIには有意差が検出されなかった。表VIIは、SEMACの分散分析の結果である。ここにおいても、正語法の場合と同様に学力差 ($F(1, 2) = 481.3440, p < .01$) と条件差 ($F(2, 2) = 111.2615, p < .01$) が有意であり、クローズテスト間

Table V

Mean scores of cloze tests
and
Increase in scores, Group B

	C-I	C-II	C-III
Exact	21.77	17.80	17.47
SEMAC	26.53	23.74	22.73
GRCO	33.13	30.97	33.43
SEMAC Increase Over Exact	21.86%	33.37%	30.11%
GRCO Increase Over Exact	52.18%	73.99%	91.36%
GRCO Increase Over SEMAC	24.88%	30.45%	47.07%

Table VI

Analysis of variance of Exact scores

変動因	SS	df	MS	F
学力差	21.2816	1	21.2816	44.9358*
条件差	21.4286	2	10.7143	22.6230*
誤差	0.9472	2	0.4736	
全体	43.6575	5		*P < .05

の有意差もC-IとC-II, C-IとC-IIIとの間に有意差があったが, C-IIとC-IIIにはその差が検出されなかった。

表VIIIは, GRCO得点に関する分散分析の結果を示している。A, Bグ

Table VII Analysis of variance of SEMAC scores

変動因	SS	df	MS	F
学力差	34.4161	1	34.4161	481.3440**
条件差	15.9104	2	7.9552	111.2615**
誤差	0.1429	2	0.0715	
全体	50.4694	5		

Table VIII Analysis of variance of GRACO scores

変動因	SS	df	MS	F
学力差	33.1350	1	33.1350	213.0868**
条件差	5.2801	2	2.6400	16.9774
誤差	0.3109	2	0.1555	
全体	38.7260	5		**P < .01

ループ間には有意差 ($F(1, 2) = 213.0868, p < .01$)があったが、条件差は有意でなかった ($F(2, 2) = 16.9774, p > .05$)。

6) 考察

以上の結果から、仮説1, 2, 3, 4は、ほぼ肯定できる。予測力を正語法と SEMAC の得点に限定すれば、英語学力の高い集団は、すべてのクローズテストで予測力が高く、意味把握に基づく予測を多く立てることが認められ、また、学力の異なる集団においても、文化的距離が最も近い日本文化の題材で予測は最も高められ、意味の予測が最も広がったが、最も遠いアラブ文化の題材では予測は最も低い点が判明したからである。仮説6については、分散分析の結果からは判断が困難であるが、表 IVと Vで示された正語法と SEMAC に対する GRAC の増加率に従えば、学力の高低に関係なく、文化的に遠い題材は文法的知識に依存する予測を高める傾向にある。

と言えるであろう。仮説5は棄却せざるを得ない。学力の低い集団は、高い集団よりも文法的知識に依存する予測力が低くなっており、仮説と対立する結果となった。

英語学力の高い集団が、意味論、統語論の両レベルにおいて、予測力を発揮でき、学力の低い集団が困難である事実はどうのように解釈できるであろうか。学力の高い集団は、文法的知識、語彙力に優れており、予測に関する統語論と意味論上の制約に関する知識が内在化されており、クローズテストの削除語を復元する時に、その知識が有効に働き、予測の量が多くなり、かつ、その正確さが高められるからであろう。学習者にとって文化的に身近な題材は、学力の高低に関らず、文法的判断に意味的判断が加わった予測力を増すが、文化的に遠い題材では、予測が文法レベルに留って、上部判断の意味レベルまで至らない。身近な題材が意味の予測を高める理由のひとつとして、前述の一般的文脈と局部的文脈を挙げることができよう。身近な題材では、話題である一般的文脈は容易に理解でき、クローズテスト内の削除語に近接した局部的文脈に、より多くの注意を払う余裕があり、理解された一般的文脈からのフィードバックを求め易い。一方、文化的に離れた題材では、予測に必要な一般的文脈の理解が不十分であり、語の補充に必要な情報が得られにくく、従って、不十分な理解のまま、局部的文脈から、補充語の予測を強いられ、結局、文法的知識に頼るからであろう。

クローズテストにおける題材の文化的距離は、被験者が持っているその対象についての知識の量の差に関連している。Douglas・山田²⁰⁾は、同テストに用いられるテキストの内容に関する知識の量が、テストの得点に影響を与えるか否かを調査し、テスト実施前に原典とその和訳文を与えた集団は、単にテストのみを与えた集団より得点が高くなり、結局、学習者の知識の量が予測に好ましい効果をあげたと報告している。同様に、前述のSteffensen, et al.²¹⁾も、題材の文化的背景に関する知識は読解の速さを決定すると指摘している。クローズテストでは、視覚的情報が欠如した部分が無

作為に作られており、Smith のいう非視覚的情報が削除語の復元に関与している。従って、大局的には、非視覚的情報である文化的知識の量が、予測に反映すると考えられる。本実験では、被験者が最も多くの知識を持つ日本文化を題材に選んだクローズテストと、最も知識の少ないアラブ文化を題材とした同テストの間に、予測の質と量の両面で有意差が検出され、

Douglas・山田と Steffensen, *et al.* の結論を一部支持する結果となった。

しかし、被験者にとって、日本に次ぐ身近な米国文化と最も遠いアラブ文化のクローズテスト間には、被験者が後者の同テストで文法的知識に比較的強く依存して予測を立てる傾向があること以外、結論は導き出せなかった。つまり、本実験結果からは、最も身近な題材と最も遠い題材との間に、学習者の予測は、質量ともに変化したと述べるに留る。しかし、予測が、題材の文化的距離と学力と一定の関係にあることが判明した。

結語

本論では、読みの活動の本質を予測という視点から捉え、そこに見られる読み手の主体的行為が、各種の知識と関与している点を明確にし、予測を、題材の文化的距離と学力との2要因から考察した。今後の課題として、学習者の知識構造 (schema) の観点を入れて、読みの活動を解明したい。

〔注〕

- 1) 本論は、第7回全国英語教育学会早稲田研究大会(1981年8月6日・7日)において、「読みにおける予測と題材について」と題して口頭発表した内容に加筆、一部修正を行ったものである。
- 2) 垣田直巳 他(1981)「英語学習意欲—英語学習と動機づけ」『英語教育』(大修館)9月増刊号 pp.58-67. 参照。
- 3) Corder, S. Pit (1967) "Significance of Learner's Errors," *IRAL* 5,4, July, pp.161-170.
- 4) Selinker, Larry (1972) "Interlanguage," *IRAL* 10,3, Aug., pp.209-231.
- 5) Krashen, Stephen D. (1977) "The Monitor for Adult Second language Performance," in Burt, M., H. Dulay and M. Finocchiaro (eds.) *Viewpoints on*

- English as a Second language* (Regents Publishing Company, Inc.) 1977, pp.152-161.
- 6) 西田 正 (1980) 「Cloze Procedure から見た大学生の英語読解過程」『言語文化研究』(広島大学総合科学部紀要) Vol.6, pp.67-87.
 - 7) Goodman, Kenneth S. (1967) "Reading: A Psycholinguistic Guessing Game," *J. of the Reading Specialist* 6, pp.126-135 in Singer, Harry and Robert B. Ruddell (eds.) *Theoretical Models and Processes of Reading* (International Reading Association) 1976, pp.497-508.
 - 8) *Ibid.*, p.498.
 - 9) Smith, Frank (1978) *Reading* (Cambridge U.P.) pp.12-36.
 - 10) Carton, Aaron S. (1971) "Inferencing: A Process in Using and Learning Language," in Pimsleur, Paul and Terence Quinn (eds.) *The Psychology of Second Language Learning* (Cambridge U.P.) pp.45-58.
 - 11) Cziko, Gary A. (1978) "Differences in First-and Second-Language Reading: The Use of Syntactic, Semantic and Discourse Constraints," *CMLR* 34, 3, Feb., pp.473-489.
 - 12) Wildman, D. M. and M. Kling (1978-79) "Semantic, Syntactic and Spatial Anticipation in Reading," *Reading Research Quarterly* 14,2, pp.128-164.
 - 13) Olshavsky, Jill Edwards (1976-77) "Reading as Problem Solving: An Investigation of Strategies," *Reading Research Quarterly* 12,4, pp.654-674.
 - 14) Graesser, Arthur, C., Nicholas L. Hoffman and Leslie F. Clark (1980) "Structural Components of Reading Time," *J. of Verbal Learning and Verbal Behavior* 19, pp.135-151.
 - 15) Steffensen, Margaret S., Chitra Joag-Dev and Richard C. Anderson (1979) "A Cross-Cultural Perspective on Reading Comprehension," *Reading Research Quarterly* 15, 1, pp.10-29.
 - 16) Harris, D.P. and L. A. Palmer (1970) *A Comprehensive English Language Test for Speakers of English as a Second Language* (McGraw-Hill Book Company).
 - 17) クローズテストC-Iは, Garbarino, Merwyn S. and Rachel R. Sady (1975) *People and Cultures* (Rand McNally and Company) p.448, C-IIIは同書p.148., C-IIは, Ney, James W., Michio Nishimura and Masayuki Akiyama (1980) *American English Up-to-Date* (Nan'un-do) p.134 を, それぞれ, 原典とした。
 - 18) Hunt, Kellog W. (1966) "Recent Measures in Syntactic Development," *Elementary English* 43, Nov., pp.732-739. in Lester, Mark (ed.) *Readings in*

Applied Transformational Grammar (Holt Rinehart and Winston, Inc.)
1970, pp.187-200.

Gaies, Stephen J. (1980) "T-Unit Analysis in Second Language Research: Applications, Problems and Limitations," *TESOL* 14, 1, March, pp.53-60. 参照。

- 19) ここでいう Grammatically Acceptable Scoring は, Alderson, J. Charles (1980) "Native and Nonnative Speaker Performance on Cloze Tests," *LL* 30, 1, June, pp.59-76. で示された IDFC (the identical form class procedure, which allows any replacement which comes from exactly the same form class as the deletion) と ACFC (the acceptable form class procedure where any replacement from an acceptable form class is allowed provided it fills any grammatical function as the deletion) の採点法を指す。
- 20) Douglas Dan・山田 純 (1978) 「クローズ法の一側面—テキストに関する知識の効果について」『広島大学教育学部紀要』第2部 第27号 pp.41-51.
- 21) Steffensen, *et al.* (1979)

Appendix

Cloze-I *Living in Modern Japan*

Miss Shimoda's best friend met her future husband at a company outing. She does not believe in (going) to matchmakers. However, her parents (looked) into the young man's background (very) carefully before they would allow (her) to consider the possibility of (a) match. The Japanese consider marriage (very) important. One chooses a husband (or) wife with care.

Miss Shimoda (and) Mr. Yano do not plan (to) live with his parents even (though) he is an oldest son. (They) want to be on their (own). Someday, however, his mother and (father) will be too old to (live) alone. Then they will go (to) live with their son and (daughter-in-law).

In the meantime, the young (couple) hopes to find a two-room (apartment) that is not too expensive. (Mr.) Yano is sure that the (company) will help them find one. (At) one time, it provided housing (for) all its employees. Now that (land) has become so expensive, it (can) no longer afford to do (so). However, the company will still (help) its employees locate good apartments. (If) they decide to build their (own) home, it will also loan (them) money.

The couple plans to (furnish) one room of their apartment (with) Western-style furniture and the other (in) Japanese style. Both are convinced (that) tatami

mats make the best (beds). Besides, Western-style beds are very (expensive) and take up a lot (of) space.

Mr. Yano makes enough (to) support a wife, but Miss (Shimoda) is going to go on (working) for a few years. The (extra) paycheck will come in handy. (There) are many things they would (like) to own — a stereo, a (car) and a color television set. (They) might even sign up for (a) tour of Europe or the (United) States.

It will be a (few) years before the couple is (ready) to start a family. The (Japanese) are very concerned about the growth of population in Japan.

Cloze-II *Living in America*

In America, it is the custom that the parents of the bride pay for the wedding. Since a bride usually marries (only) once, there is usually a (big) celebration with dinner and dancing (until) the night is over. If (there) is only one daughter in (the) family, the occasion is even (more) important. If that one daughter (decides) to elope, that is, get (married) without a big wedding ceremony, (then) the mother at least should (express) a lot of sadness. The (one) opportunity for a big celebration (has) gone. In this, the father (should) put the best face on (the) matter. He might point out (that) the elopement saves him a (lot) of money and that his (daughter) has a lot of intelligence. (He) might say that she will (come) back to her job and (her) home to stay while the (young) couple looks for an apartment. (He) might even offer evidence for (his) beliefs. He might say, "I (checked). She left most of her (clothes) in her room." To him, (this) would show that she is (coming) back. Nevertheless, he might feel (sad). Just like his wife, he (might) be disappointed that there is (no) wedding. He (might) have been (looking) forward to the big ceremony (and) the party after that. He (might) be disappointed that he will (not) see his brothers at the (wedding) ceremony. But there is little (that) he or his wife can (do). His daughter is of age. (She) can do what she wants (to) do. If she is past (21), she can go off and (get) married in any state. In (fact), in many states she can (marry) at 18 or at a (younger) age without asking permission of (her) mother and father. So there (is) little that the mother and (the) father of the young woman (can) do. They can only sit (and) wait for her to return.

Cloze-III *Life in the Desert*

Young people do not decide whom they will marry. Marriages are arranged by their (parents). A parent wants his son (to) marry a girl who comes (from) a good family and is (a) hard worker. It is very (important) that the new member of (the) family help the group. Parents (do) not want their son to (marry) a girl who will be (a) burden.

Parents do not care (whether) the young people like each (other). Love is supposed to come (after) the marriage, not before. They (want) their son to marry his (father's) brother's daughter – that is his (first) cousin. In fact a man (has) the right to marry this (cousin).

A girl cannot marry anyone (else) unless her cousin allows her (to) do so. This is an (accepted) rule. If a girl refuses (to) marry her cousin or marries (someone) else without his permission, he (has) the right to kill her. (In) such a case, no one (would) try to take revenge for (her) death. Many sad stories are (told) of girls who married without (their) cousin's permission.

In spite of (these) customs and traditions, young people (fall) in love. Many of the stories and (poems) recited around the campfire tell (of) young men “mad with love”. (Boys) often meet and court girls “(among) the camels” when families have (come) together in summer camp. The (young) men especially favor a girl (who) is good-natured or one with “(a) face round as the moon, (and) eyes like those of a (gazelle).”

Parents must give permission and (arrange) any marriage – even if it (is) a love match. If the (couple) elopes their relatives will chase (after) them. Later they will be (punished).

Binniyah was a bedouin girl (who) fell in love with a (young) herdsman. Her cousin would not (give) them permission to marry, because (he) hoped to have her as his own bride.

Expectancy and Cultural Familiarity in English Reading Comprehension

Tadashi NISHIDA

In spite of the large amount of research that has been done on first language reading, very little concerns the investigation and analysis of the processes in second language. A reading theorist, Goodman (1967) suggests that reading is a selective process in which the reader makes efficient use of minimal language cues in order to produce guesses. With this line of thinking, Smith (1978) indicates the significant importance of non-visual information in understanding printed information. Some psychologists, such as Carton (1971), Wildman and Kling (1979), and Olshavsky (1976-77), analyze cue systems and strategies the reader uses in the receptive processes.

This study was designed to examine how the reader's expectancy in the prose was affected by 1) cultural familiarity with the passage and 2) English proficiency. The main hypotheses to be tested were: the culturally familiar passage would facilitate the reader's expectancy regardless of his English proficiency; the reader with high English proficiency would expect more language elements than the reader with low proficiency regardless of the cultural familiarity of the passage. Sixty students enrolled in English 1 classes at Hiroshima University were given CELT (S-A, V-A, and L-A Forms) prior to three cloze tests.

The cloze tests, each of which included 49 items, were constructed by deleting every sixth word from three culturally different passages

(Japanese, American, and Arabian) adapted from two books. The syntactic complexity of the passages was controlled. The passages described in common a young couple's and their parents' marital arrangements in each culture. The responses were scored by three different procedures: Exact replacement (Exact), Semantically acceptable (SEMAC), and Grammatically acceptable (GRCO) scorings.

The results of CELT showed that Group A (N=30) was superior to Group B (N=30) in English grammar, vocabulary, and hearing skill. A two-factor analysis of variance with groups (A and B) and conditions (Japanese, American, and Arabian cultural backgrounds) was done on each cloze test scores of the two groups.

As predicted, both Groups A and B clozed significantly more items, exactly ($P < .05$) and semantically ($P < .01$) for the Japanese passage than for the American and Arabian passages, although the differences in the GRCO scores for the three passages proved insignificant. Group A was significantly more successful in filling the deleted words, exactly ($P < .05$) and semantically ($P < .01$), as well as grammatically ($P < .01$) than Group B in all passages.

On the basis of the results, we conclude tentatively that the culturally familiar passage tends to facilitate the reader's expectancy of semantic constraints regardless of his English proficiency. It is also confirmed that the reader with higher English proficiency is more successful in expecting successive language elements in terms of his knowledge on semantic and grammatical constraints.